

海のオールラウンダー〜長い積み重ねの上にある今〜

名人 池田 幸一郎・山形県酒田市

聞き手 宮島 梧子・東京都 女子学院高等学校2年

■自己紹介

池田幸一郎。79歳。昭和14年12月5日生まれ。10人きょうだいの7番目。山形県の飛島で生まれて、ずっとここに住んでいます。仕事は漁業。時期によって、さまざまな漁をやります。子どもは4人。長男は自分の船で出稼ぎさ行ってる。真ん中の娘2人は千葉と酒田、一番下の息子は仙台にいるよ。誰も飛島にはいねえから、こうしてばばと2人して暮らしてるよ。

■幼少期

生まれてから中学卒業まではずっと飛島。物心ついたときから、船に乗って、漁したもんだよ。昔は堤防もないもんで、家の外はすぐ浜だったんですよ。それこそ学校も行かないころから、竿1本持って、磯を見て釣りしたもんだ。アワビとりは、小学校4年から。家そのものが代々漁業やつてるもんで、親父も漁師だった。親父は、漁師でもあり大工でもあったんや。

道具作ったり船作ったり、なんでもやってたんよ。俺はカナヅチに触るとさえも許されなかったつけ。絶対持つなア、プロの道具に触るなアって。自分では言わなかったけれども、やっぱり自分の子どもは漁師一筋でやらせたかったんでねえかと思う。大工と両方は厳しいってよ。
きょうだいのなかの男1人だったけど、小さいときから負けんず嫌いで、人から1個叩かれれば2個で返すような、簡単に言えば荒っぽい気性だったんや。

■若いころの記憶〜出稼ぎの半年〜

中学卒業してすぐの昭和30年から、昭和49年まで、毎年今の函館市にイカ釣りに出た。6月末に飛島を出て、番屋^{ばんや}っていう漁師小屋と船を行き来して、12月まで函館で商売する。
常に変だったよ。今みたいな設備の船で、出稼ぎ行くと、船生活するもんじゃない。戦後でもののない時代だったもんで、むしろのうえにござ

を敷いたところに、毛布1枚か2枚被って寝る。昔は機械もないもんだから、ぜんつぶ釣り（ずんぷづり）で。軍手もゴム手もないから、とにかくぜんつぶ何（なん）使（つか）ってやるって、素手（すて）よ。全部この素手ひとつなんや。そうするとイカの脂にやられちゃって、手がいたんで。休（やす）みになれば、函館（はこだて）の谷地頭（やちがしら）温泉（おんせん）っていう、ものすごい厳しい塩（しほ）の温泉（おんせん）さ行った。3日くらい経（へ）てば、手のいたんだのが治（な）るんだっけ。そやけ、風呂（ふろ）だけは、10円（えん）だっけか15円（えん）だっけかで、仲間（なかが）と一緒に電車（でんしゃ）乗（の）って行（い）った。楽しみは映画（えいが）を観（み）ることぐらい。飛島（ひじま）には、映画館（えいがく）もなければなんにもないけど、函館市（はこだてし）ったら北海道（ほくかいどう）でも3本指（さんぽさし）に入る市（し）だから、我々（われわれ）からすると何でもあつたんや。

昭和32（しやうわ32）年（ねん）ごろから、函館（はこだて）が、あまりイカ（いか）がばつとしくなつたもんで、今度は函館（はこだて）から道東（どうとう）方面（へいめん）に行（い）った。北海道（ほくかいどう）の道東（どうとう）方面（へいめん）は霧（きり）の世界（せかい）なんよ。どこも見えね。いつ誰（たれ）とどこで衝突（どうつう）してもわかんねえんだ。これを全部（ぜんぶ）ラジオ（らじお）ビーコン（beecon）ひとつでのう……あの周波数（しゅうはすう）、なんぼだっけな。まあその周波数（しゅうはすう）で、ビー（bee）って長い音（おと）が出てから何個（なんこ）鳴（な）ったかで、何度（なんど）の角度（かくど）から入（い）ってくるかわかるでよ。今は、リーダー（リーダー）で確認（かくにん）してお互（たが）いの船（ふね）が走るけども、当（た）時はそんなもんねえんだす。日本（にっぽん）中（なかつ）どこ行（い）くつたって、自分の目（め）とビーコン（beecon）とが頼（たの）りで。

昔（むかし）は天気図（てんきず）も自分で手描（てがえ）きだつた。ラジオ（らじお）ひとつで正確（せうさく）にとれるんだよ。漁業（りやうぎや）気象（きさう）のなかさ、航空（くわくう）気象（きさう）入（い）れてく。小学校（しょうがっこう）さ入（い）ったところから、見（み）よう見（み）まね（まね）で描（え）き始（はじ）めた。慣（な）れてくると、ひとつずつチェックしなくても描（え）けるようになった。今（いま）でも、頭（かぶ）のなかで描（え）けるよ。

船（ふね）のうえでの仕事（しごと）は、だいたい2人（に）ずつで分担（ぶんたん）があつての。若い衆（しやうしゅう）が一番（いちばん）先に立（た）ってやる仕事（しごと）と、年寄（としより）のやることと。3年（さんねん）目（め）ぐらいまでは、毎日（まいにち）ご飯（ごはん）の準備（じゅんび）。イカ（いか）の刺身（さしみ）作り（つくり）よ。昔（むかし）はごちそう（ごちそう）っていつても、生活（しやうか）が裕（ゆ）福（ふ）でないから、自分のとったイカ（いか）の刺身（さしみ）しかないんよ。まあいにち食（た）べるとこれが飽（あ）きてくる。でも他に食（た）べるもんないんですよ。1人（ひとり）3杯（さんはい）ぐら

いずつだから、20人（にじゅうにん）だつたら60杯（むそはい）のイカ（いか）を毎日（まいにち）ぜんつぶ切（き）るのよ。

■若いころの記憶／飛島での半年

出稼（でせ）ぎのない半年（ごうねん）は、飛島（ひじま）で仕事（しごと）。12月（じふにがつ）に島（しま）さ帰（かえ）ってきたら、すぐアワビ（あわび）とり。4月（よしか）の祭（まつ）りを基準（きせん）に、海藻（かいそう）とりに切り替（か）えて行（い）く。ワカメ（わかめ）とるつつても、全部（ぜんぶ）素手（すて）でねじ伏（ふ）せてやるもんだから、漁（り）から帰（かえ）ってきたらまずめでいっぱい（めいっぱい）。それを破（やぶ）りでもして次の日（あした）また漁（り）に出（で）るんよ。それが一番（いちばん）つらかった。海藻（かいそう）とりは6月（じゅうがつ）で終（お）わり。そのころになると、海藻（かいそう）も干（ひ）上が（あ）って製（せい）品（ひん）にならないからね。そうするとまた6月（じゅうがつ）の末（すえ）から出稼（でせ）ぎで、同じ（おな）じ繰（くり）返（か）し。

出稼（でせ）ぎに年（とし）いつて行（い）かなくなつた人は、海藻（かいそう）とりのシーズン（しーずん）終（お）わつてから、トビウオ（とびうお）とつたり、サザエ（さざえ）とつたり。

飛島（ひじま）では米（こめ）がとれないもんで、当（た）時はすぐ買（か）いに行（い）ける場所（ばしょ）もなかったもんだから、酒田（さかた）の農家（のうか）とのぶづこ（ぶづこ）（物々交換（ぶつぶくかんげん））で米（こめ）を得（え）たんですよ。昭和40（しやわ40）年の半（はん）ばごろまで。まずは我々（われわれ）飛島（ひじま）の者（もの）が、田植（い）えの前（まえ）に、飛島（ひじま）で春（はる）にとれた魚介（ぎょかい）を酒田（さかた）に持（も）って行（い）く。こんとき、敬意（けいぎ）を表（あらわ）して多（おほ）めに渡（わ）しておくんよ。それで5月（ごがつ）末（すえ）くらいに、田植（い）えを終（お）えた酒田（さかた）の人（ひと）たち（たち）を飛島（ひじま）でもてなす。定期（ていき）船（ふね）の着（き）く港（みなと）まで自分の船（ふね）で迎（むか）えに行（い）って、10人（じゅうにん）も15人（じふにん）も、家（いへ）に泊（と）めるのよ。2日（ふたにち）間（かん）くらい仕事（しごと）も休（やす）んで、一緒に飲（の）み食（た）いして。それが終わ（お）るともう6月（じゅうがつ）で、我々（われわれ）は出稼（でせ）ぎに行（い）くでよ。12月（じふにがつ）ごろに島（しま）に帰（かえ）ってきたら、船（ふね）で酒田（さかた）に行（い）って、春（はる）に渡（わ）した魚介（ぎょかい）と引き換（か）えに、秋（あき）に実（み）った米（こめ）を回（わ）収（しゅう）するわけよ。酒田（さかた）には米倉（こめくら）がたくさんあつたら？ あそこからもらってくるんですよ。人と人（ひと）との信（しん）頼（らい）なしではできないことだよ。そうやって、お互（たが）いに助（たす）け合（あ）ってやってたんですよ。

■転換点〜出稼ぎ引退〜

昭和49年に30なんぼで出稼ぎやめて、そこから格闘が始まったでよ。どうしたら魚をとれるかっての。ずっと人と共同しあって仕事してたけども、水揚げも少なくなってたもんだし、1人にしたら全部自分に入ってくるしと思って。

どうすれば1人でできんなんか、そこから始まった。たとえば、潮の流れがあるなかで、魚を100発100中では、どうやったらいいかって研究したんや。今はやりかたも変わったけども、昔は拍子木^{ひょうしぎ}こさえて、その拍子木を水深90mくらいまで入れるわけよ。するとその拍子木が流れる。その流れに沿って行くと、100発100中で魚をとることができると。

研究するといっても、漁によつてさまざまな見方がある。たとえば、カニとるために網しかけるだろ？ こんとき、泥なめてみて、その泥がおいしいか、あまあい味がするかしねえか、ここまでしてきたよ。おいしい味がしなけりゃ魚もすめないでしょ。人と一緒。みんな同じだよ。このごろの沈んだところの泥は、酸性に変わってすっぱえ味するんですよ。そうなら魚もすめねえ。畑でも、土



自宅近くの小屋は、仕事道具でいっぱい。奥に写っているのが名人

壤が豊かだとミミズがいるでしょう。それと一緒になんですよ。海のなかにも土のなかとおんなじように、ゴカイとかがいっぱいすむんですよ。

1日1日がとにかく時間との勝負なもんだった。漁に出て行く時間も、漁に合わせた時間帯で、一晩中寝ないこともあるし。マグロ釣るつたら、自分の場所とるために、1人で10時間でも、寝ないでついたりしたもんだよ。

■アワビと名人

サザエなんかであれば若い人もそれなりにとることができるけども、アワビにおいてはやっぱり技術。アワビだけは、目が良くてとれないし、腕力^{わたりよく}があつてもとれない。まったくの技術なんです。特に夏のアワビは岩に同化^{どうか}して一番見にくいもんで。飛島でも、とれる人少ないと思うよ。

飛島では昔から、箱眼鏡^{はこめがね}と、ヤスつていう、端におもりが付いた木の棒を使つてとるんよ。簡単にやればいいんだけど、一番深いところだと箱眼鏡で水深20mくらいまで見なきゃならないし、潮の流れも日によつて違つてのう。箱眼鏡はそのままにしておくとどつかへ流れて行つてしまふから、船の脇にヒモで括つておくの。船のうえから箱眼鏡で見つけたアワビ目がけて、ずうーっと水の底の方までヤスを入れてつて、アワビを落とさねえように、ヤスの先に付いてるかぎで引つ掛ける。引き上げて船



箱眼鏡。先が輪になったヒモが付いている

んとこさきたら、手で外すんよ。ヤスの長さは10mから、長いもんだと20mくらいある。これだけの長さのヤスでとるのは、日本中で飛島だけだよ。俺は長いヤスは年で使えなくなっただけのもの。ヤスは漁に3本持つて行って、重みで使い分ける。杉の木でできた軽いのもあれば、櫓の木でできた重いものもある。箱眼鏡はガラスが割れたら交換すっただけ。もう何十年も使ってんよ。杉には白木と赤木があつての、ガラスを差し込む面は、水が入っても膨張率の小さい白木じゃないとだめなんです。木でいうと樹皮に近い方。膨張率が大きい赤木は、ガラスのここには絶対使わん。他の面には使ってもいいけども。

アワビは、ほんと夏も旬なんだけだよ。でも、稚貝を多く出すために、産卵期の夏の漁は極力やめることになってんよ。それで冬が旬ってことになってるわけ。夏の漁は、8月1日から13日までだけ。お盆に来たお客さんに自分の家さ出すくらいしかとらないように、この期間になってんよ。あとは冬さね。12月1日が解禁で、3月いっぱいまでとるよ。若いときは1日200個もとったねえ。アワビは刺身かこみそ煮にして食べんよ。アワビのわたを我々はゴロっ



(左) アワビ漁時の船のようす (平成 29 年、澤口與四一さん撮影) (右) ヤスを持つ名人

て呼ぶんだけど、そのゴロを使ってアワビを煮るのがこみそ煮といって、飛島独特の味なんよ。おつゆかご飯にかけて食べると、それまた格別おいしいんや。ご飯何膳でも食べれるつての。

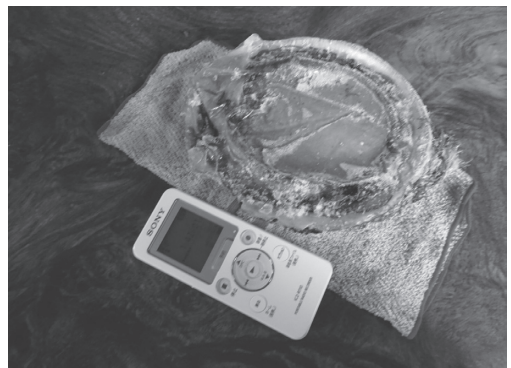
■オールラウンダーの仕事道具

魚によって漁法は本当にさまざままだ。網の目合い、網を仕掛ける場所、使う道具やエサも、全部変わってくるでの。そやけ、漁さ行く前に、季節や天気も考えて、今日は何がいいんだろう、って自分で判断する。

一番整備に手間がかかるのは網だね。おもりになるロープは、1mで何kgもある。これに、とるものに合わせて他の材料を絡めていく。この下にあのおもり付けて、こつちにこのおもり使って、あれとそれの間にこれを付けてこの網を付ける…って、自分で考えて網を作るんよ。絡めるときに使う道具



網を作る道具も、材料に合わせて使い分ける



今年の夏、名人がとったアワビ

も、作る網によって違うもんを使うから、大きいのも小さいのものもある。テグス、ほら、今でいうナイロンなんかを絡めるときは、小さいのを使ったりの。

最近とりに行ったのはマグロ。はえなわでとるだよ。釣り針のエサを掛けるここは返していったって、ここに20cm、800gくらいのイカを掛ける。返しがなかったら、魚がすぐ外れんよ。ウキは、付ける場所と個数とで、沈む深さを調節しての。1針に対して7個必要だから、10針やるなら、70個持つてく。

普段使っているものを使ってみたよりもするよ。たとえば、髪とかす櫛^{くし}ってあるでしょ。あの櫛使ってモズクとると、モズクが櫛の間通る。そやけ、きれいにとれるんだよ。俺の秘密兵器だよ。そうやって、今までの漁具だけでなくて、あるものを使って、こうしたらどうだろうって、自分で考えて変えていくんも、生活の知恵だよ。

■ぬかりない情報収集

新しい漁法を知ったら、それをいち早く取り入れるだよ。ただ、土地に



はえなわ漁に使う釣り針。先端付近の尖った部分が返し



ウキ。7個ずつ束ねられている

よって合うか合わないかってのがあるでしょ。そやけ、どういふふうにしたら飛島に合うんだろか、どうやったらもつといいかって探して、知恵を引っ張ってくる。漁師のこととかテレビでやってるのも、漠然とは観てないよ。この地域ではこういうふうにやってるんだあ、この人はこうやってるんだあって、考えながら観てる。それを糧^{かて}にして、自分はこういうふうにやったらいいか考える。

他の支部からの電話もある。漁師仲間同士で、こういう漁法が良かったとか、最近はどうだとか、さまざまなことを話すよ。

■新鮮さへのこだわり

とった魚は網にかけたまんま持つて帰ってきて、ばばと2人して港でかぎできれいに外す。アワビなんかはすぐ持つて帰って、いけすに泳がせとく。何日かで出荷できつから、なるべく長く生きたままにしとくんよ。とってきたもんは、すぐまず漁協の飛島支所にやる。そこから定期船^{ていきせん}に積んで、酒田の漁協さ持つて行くんだ。そいで仲買^{なかがい}に卸^{おろ}して、酒田の方で市場に出回るんけ。

今、ますます、魚は生きてなければだめだとか、数がなければだめだとか、そういう時代になってしまつて。そういう価値のものは飛島から届けにくいんよ。急に定期船の便がなくなつてしまったとか。ならば加工しろと言われても、加工するだけの設備がここにはないし、大きい冷蔵庫もない。けど、そんな飛島からでも、できるだけ新鮮なものを届けたいんよ。

■老いと仕事、飛島に生きるということ

このごろは、人と同じ行動はとらないことにした。もう年で、とれるだけとるなんてできねえ。若い人はついていけたって俺はついていけない。そやけ、自分で考えて、好きな日に休む。そうやって、若い人と同じやり

かたではだめだと思って、年と共に変えてつてるんよ。船は3つ持ってたけども、今自分とこに持つてるのは一番ちやつこいやつ。あとの2つはもう息子の名義にした。同年代の漁師仲間は、亡くなったり酒田の施設さ行ったりで、もういなくなつてよ。なんで俺が続けられてつかはわからないけど、身体は丈夫だし、生活はまずまず規律がいい方だろうね。8時に寝て、2時から3時ごろ、起きる準備だもの。布団のなかで、漁法のこととか、仕事のことを考えてるわけよ。

今、飛鳥は小中学校もやってねえし、1年に10人のペースで人が減つて。もうこつから全員引き揚げてもいい状態になつてんで。年いくと、島にはねえもんだから、酒田の方に行つて施設さ入るだろ。そうやって1人ずつ減つていくんだ。俺も息子から言われてんだ、親父まだ頑張るのかあ、つて。そやけども、我々が引き上げていったら、飛鳥は活動できなくなる。それを見捨てるような恰好では引き揚げられねえもん。

我々みたいなもんは飛鳥が好きなんよ。飛鳥さいれば、何やつたつて楽しい。何をするつていつても、おもしろえんだよ。もう人生に何の悔いも残してねえ。やるべきことは全部したし。そやけ、ばばと2人して、ああ今日は休むかあ、漁に行くかあつて、やつてるだけよ。今日はアワビ食べようか、サザエ食べようか、つていう暮らしなんや。我々の暮らしは自給自足だもの。



名人の住む法木地区に続く道

■ “漁師のほんとのすがた”——それは名人そのものだった

漁師は一匹狼^{いっぴきおおかみ}。先生もいなけりや達人^{たつじん}もいない。自分で考えてやつて行く。それが、漁師のほんとのすがただと思ふよ。

体で覚えるしかないんよ、技術つてものは。基本的なことは先輩方のものを全部見よう見まねでやつて、あとは体で覚える。あれしなさいこれしなさいつて言う人の教えばかり気にしてたら、絶対自分で考えられねえ。自分のやりかたつてもんを研究しなかつたら、ぜえつたいに成長していかないんよ。逆に、自分で考えたときの成長つてのは、無制限だよ。目標を自分の心のなかに刻んでおいて、俺はこういうふうにするつて決めてやれば。社会での仕事つてものは、自分が努力したもんだけ伸びるんですよ。俺あ、努力は人の倍以上してきたな。率先して、何でもやつてきた。それだけは、言えるよ。

〔取材日…2019年10月20日〕



名人宅前にて、名人（幸一郎さん）と私。初めてカメラに撮れたという妻の睦子さんが撮ってくださった

【聞き書きを終えての感想】



お話をするなかで、幸一郎さんは、誇りと謙虚、情熱と冷静、オールラウンダーとスペシャリスト…といった、一見相反するさまざまなものを持ち合わせた方だと感じました。幸一郎さんが力を込めて伝えてくださったことはたくさんありましたが、なかでも、取材の終わりにポートレート撮影させていただこうとしたときの、「俺の顔なら家の正面で撮れえ」ということばが印象に残っています。取材前は、名人のポートレートは仕事の道具と一緒に写っているところにしよう、などと考えていましたが、ポートレートを撮影するタイミングを取材の最後にしたからこそ、先祖代々守ってきた土地に建つ自宅の前で撮りたい、という幸一郎さんのことばの持つ意味を受け取ることができたように思います。

聞き書きを終えた今、私は、幸一郎さんご自身の人生に対する強い自信の根底にあるのは、家族や仕事、そして何より飛島という土地に対する深い愛と、その愛を原動力とした努力だと感じています。

聞き書き甲子園への参加は、私にかけがえのない出会いを与えてくれました。きっとまた、飛島に流れる時間と、幸一郎さんの叱咤^{しつた}激励^{げきれい}のことばを求めて、飛島行きの定期船に乗る日がくるような気がします。



profile

池田 幸一郎

いけだ こういちろう

昭和 14 年 12 月 5 日・80 歳

職業：漁業

【略歴】 飛島生まれ、飛島育ちの 80 歳。若いころは、毎年北海道へイカ漁の出稼ぎに行っていた。昭和 49 年に出稼ぎを引退してからは、通年を飛島で過ごす。1 人で漁に繰り出し、飛島のあらゆる海の幸をとることができる漁師として、島でも良く知られた存在である。なかでも定評があるのはアワビ漁。山形県漁協の理事を務めた経験もあり、今でも全国のさまざまな地域に出張に出かけるなど、ほかの漁師との交流も盛んに行っている。